

## ランボー「悪い血」の対立図式について

田中直紀

アルチュール・ランボーの九篇の散文詩による作品『地獄の季節』（1873）は、自らの分身のような詩人を語り手とする自伝的物語とみなすことができる<sup>(1)</sup>。冒頭的一篇をプロローグとするならば本文の第一篇となるのが「悪い血」<sup>(2)</sup>であるが、これは九篇中最大の規模をもち、八つの節から成っている。語り手は、フランスの古代から中世の歴史をたどりながら自らの前身を探り、近代においては自らの現状について描き出す。その過程において作中の語り手は一貫して自らをいわば「劣等種族」の「悪い血」に規定された者として提示する。文学史上、象徴派とみなされるランボーにおいて、このことは人種論めいた観念に依拠しつつも、あくまで何らかのエートスやモラルの様態を象徴的に示したものと見られるが、「悪い血」という規定から、必然的に対立項としていわば「良い血」が暗に想定されていると考えられる。作中で現代にいたると「新しい貴族」が現われ、語り手はそれに対しても対立的立場を見せる。さらにまた後半では「黒人」と「偽の黒人」との対立項が現われ、さらに「神の愛」と「地上の愛」の対立項が現れる。本論においては、これらの項目およびその関連項目のそれぞれがいかなるものか、それらはいかに対立するかについて考察する。

### 作品の構想過程・書簡と草稿

『地獄の季節』の構想について考える上の資料として書簡と草稿を概観しておこう。

ランボーは1871年5月の二通のいわゆる「見者書簡」において、自らがそ

うなろうと欲する来るべき詩人像を提示している<sup>(3)</sup>。それは、「未知なるもの」を人類にもたらすことで世界を変えろというプロメテウスの詩人像である。そのような存在となるため詩人はまず超越的認識者である「見者」でなくてはならないという。このような企図はロマン派詩人における神秘思想を背景とする詩人観の一種に基づくが、ランボーにおける特色として中地義和が指摘するようにそこにはキリスト教への対抗というサタンの動機が潜在している<sup>(4)</sup>。そしてここには十九世紀後半に見られる、サタンを圧迫からの解放者としてとらえるプロメテウスのサタン像の反映を認めることができる<sup>(5)</sup>。『地獄の季節』は見者書簡の構想を実践に移し挫折するまでの過程を描いていた「精神の自伝」ととらえられてきたが、これを自伝的物語とらえる場合は、その過程が作中の詩人に移されているということになる。

『地獄の季節』の末尾には「1873年4月～8月」の日づけがみられるが、先輩詩人ヴェルレーヌとの放浪生活から一時的に離れたランボーは1873年4月11日に故郷のロッシュに戻っており、それから間もない5月に友人ドラエに宛てた書簡で「散文による」「物語」の製作にとりかかっていることを伝えている。

しかしながら僕はなかなか規則正しく仕事をしていて、散文によるちょっとした物語をつくっている。総題は「異教徒の書」、もしくは「黒人の書」だ。

それは馬鹿げていて無垢なものさ、おお無垢よ！無垢、無垢、無……、厄介だ！<sup>(6)</sup>

つづく部分では自然を称揚する。「〈自然〉の観想などは僕をまったくうっとりとさせる。僕はそなたに帰属する、おお〈自然〉よ、おお我が母よ！」。

「異教徒の書」もしくは「黒人の書」という仮の表題、そして「無垢」や「〈自然〉の観想」という観念の強調は、西洋のキリスト教世界の外に理想郷を求めるといった志向性を示唆している。キリスト教思想は「罪」の概念を強調

し、また「自然」を矯めるべき悪とみなす傾向性を持っているが、そのような思想をのがれて原初の「無垢」をふたたび見いだし、新プラトニズム的な汎神論が強調するような「自然」の神聖さを享受しようとするような志向である。そして、西洋の外の世界、「異教徒」の世界を、空想裡の理想郷とすることはロマン派には広く見られた態度であった。失われた原初の「無垢」の回復という理想は、プロメテウスの叛逆とは必ずしも結びつかないで、それ自体で独立したテーマ系を成しているように思われる。

この書簡の二度目の追伸でランボーは友人に「近いうちに切手をそちらに送るから、民衆文庫のゲーテの『ファウスト』を買って送って欲しい」と依頼している<sup>(7)</sup>。つまり『地獄の季節』構想から完成までの期間にランボーは『ファウスト』に接したものと考えられる。

『地獄の季節』全九篇のうち確認されるかぎり三篇に該当する草稿が残されており、そこには「悪い血」該当部分の草稿も含まれる。しかし草稿では少なくとも確認できるかぎり「悪い血」というタイトルはふされておらず、内容においても決定稿における「異教徒」や「黒人」といった概念、無垢の回復への志向に関する節や段落をちょうど抜き去ったような形で、もっぱら語り手のプロメテウス—サタン的叛逆の構想に通じていくような、キリスト教の罪と救いの概念についての自問自答や葛藤や悪魔への帰依の示唆の描写からなっている。

このことは『地獄の季節』が完成するまでにあいだに、何段階かの構想の変化があったことをうかがわせよう<sup>(8)</sup>。悪魔との契約によってさまざまなものを獲得するという『ファウスト』のモチーフは、「見者書簡」の自らを「至上の知者」たらしめんとする企図に潜在的にはつうずるものであるにちがいない。ジャン＝リュック・ステンメッツは『地獄の季節』の成立過程に関する論考でドラエ宛書簡にふれながら、『ファウスト』の影響によって「ある種の人類学的フィクション（西洋の外の存在という主題、あやまちをのがれ、無垢であること）が、〈地獄〉の空間性へと移り変わり「悪魔的内容」が加わった可能性を指摘している<sup>(9)</sup>。あるいは「移り変わった」というよりも二つの要素は重

層的に組み込まれているのではないだろうか。とくに「悪い血」の完成稿では「異教徒」「黒人」と原初の無垢の探求、プロメテウス－サタンの叛逆という二系統のモチーフはいかなる形で盛り込まれることになるのだろうか。あらためて「悪い血」におけるモチーフ群を見ていくことにしよう。

### 「悪い血」と「良い血」

タイトルにある「悪い血」の語は暗に想定されるであろう「良い血」との対比においてこそ規定されると考えられる。まずその対比において両者の規定を探っていこう。

第一節は次のように始まる。

僕はガリア人の祖先から青白い目に狭い脳髓、下手な戦いぶりを受継いだ。髪にバターを塗りつけたりはしないが。

ガリア人というのは獣の皮を剥いたり、草を焼いたりといったことを生業とする、その時代の最も無能な連中だ。

僕は祖先から受け継いだもの、それは偶像崇拜と流聖の嗜好、——おお！ すべての悪徳、怒り、性欲——べらぼうな性欲——とりわけ嘘と怠惰だ。

ガリア人は、今日フランスの国土の大部分を占める土地、カエサルの時代にローマ帝国に占領されるにいたった地域の原住民とされており、民族としてはケルト系でありケルト神話の神々を崇拝していた。この描写にはタキトゥスの『ゲルマニア』におけるゲルマン人の描写の反映をみとめることもできるように見える。これをも含め、雑然と古代ローマ人から見たいわば野蛮人のイメージを表現したものと考えられる。

第二節において語り手は自らの祖先を「劣等種族」と呼んでいる。そして第三節の冒頭には「異教徒の血が戻ってくる！」とある。すなわち語り手は「異

教徒」である「劣等種族」の「悪い血」を引く者として提示しているのである。「異教徒」とは「キリスト教徒」との関係においてのみ「異」教徒なのであり、被征服民である彼らは、とりわけローマ帝国のキリスト教国教化以降は、支配者たるキリスト教徒からみて「劣等人種」なのである。そして観念としての「悪い血」の者に対して、キリスト教徒が「良い血」の者として暗に指定されていることがわかる。前者は後者との関係においてこそ「悪い」のである。ここで語り手が祖先から受継いだ「すべての悪徳」としてあげるもののうち、「怒り」「色欲」「怠惰」はとりわけ注目すべきもので、これらはカトリックの教義における七つの大罪のうちの三つなのである。このように語り手は自己規定においてあえて「良い血」の者側による蔑称を用いている。これにはキリスト教者への皮肉の意図がこめられているのは明らかであるが、しかしまた逆説的に、語り手自身がキリスト教者の思想にとらわれていることがうかがい知れるであろう。ランボー自身が少年期に至るまでは敬虔な信仰をもっていたことも考えあわせたい。セシル・ハケットは「異教徒の血」および「黒人」とは無垢と同時に罪の象徴でもあるとしているが<sup>(10)</sup>、しかしながらいわゆる罪が罪であるのはキリスト教思想がためであり、キリスト教思想こそが原初の無垢を失わせるものと語り手はとらえられているのではないだろうか。

つづく第二節では「反抗ということが、僕には理解ができない」と、無力な様を見せている。「悪い血」の属性とは、叛逆を知らない、それゆえに常に被征服者、被支配者でありつづけるそのような立場に無力に甘んずるものであることがわかる。

「僕は教会の長女たるフランスの歴史を思い浮かべる」と言って、以下においてまず中世における自らの前身の姿を描き出す。「土百姓の僕は、聖地への旅をしたかも知れない」。語り手の脳裏に浮かぶ土地は、シュヴァーベン、ビザンチン、ソリムである。シュヴァーベンはドイツ南西部の土地、ソリムは聖地エルサレムを指す雅語である。これは第一回十字軍の辿った道筋である<sup>(11)</sup>。ここでは語り手は十字軍兵士に駆出された農奴に、自身の前身を見ているのである。彼はまた割れた壺の破片が散らばるイラクサの上にくる

ライ病者である。そしてまた野営する雇われのドイツ騎兵である。そして第五段落では、魔女の夜宴・サバトが現われる。「ああ！まだある。僕はサバトで踊っている、赤く照らされた林の中の空き地で、老人たちや子供たちと共に」。

このサバトの情景について、ピエール・ブリュネルはゲーテの『ファウスト』第二部のワルプルギスの夜の場面に関連づけている<sup>(12)</sup>。しかしながらドラエ宛書簡と草稿から推定するならば、構想の基底にあると見られる「異教徒」の主題に関わる部分であり、より直接的にはジュール・ミシュレの『魔女』（1862）第十一章「叛逆の交感－サバト－黒ミサ」中の描写に依拠しているとみるべきであろう。

「悪い血」における『魔女』への依拠は主題と描写の双方においてこの部分的描写にとどまらない。『魔女』のとりわけ第一部は様々な時代における魔女のありさまを、時代を超えて生きつづける一人の架空の“魔女”を想定しながら、追って行くのであったが、語り手が自らの前身を歴史の中に求める「悪い血」の特に前半部分は構成においてもこれを踏襲していると思われる。ミシュレが『魔女』に描いているように中世期のフランスにあっては、公的にはカトリック教徒であっても、農村部においては土着的な古代宗教の伝統も並存していたのだった。そして魔女はそのような伝統の担い手である。その夜宴は本来的には「無垢」なものである。キリスト教思想にとっては、異教の古代の神々は悪魔の軍勢をなすものたちであって古代宗教は禁圧の対象である。

以上のようなことから、農奴たちはいわば半ばは先祖代々の土着宗教に帰依する者でありながら十字軍に駆り出されたということになる。魔女の神としてのサタンは、いわば被抑圧者の神としてプロメテウスのサタン像にも通じていくものではあるが、ただしここではサタンの叛逆のモチーフは前面には出ていない。十字軍の描写がある意味では「悪い血」の者の屈従を表現する一方、魔女の夜宴はグロテスクで野蛮な形象ながらも東の間の原初の無垢への回帰を表現しているのである。

## 「新しい貴族」の出現

第二節の終わり近くではフランスの歴史は近代に到達しているが、ここに「新しい貴族」という概念が現われる。『地獄の季節』の成立が第二帝政崩壊後間もないことから一見、二つの帝政下における新貴族を指すとも見えるがどうであろうか。語り手は「前世紀」には「劣等種族がすべてを覆った」として続ける。

おお！ 科学！ 人はすべてをやり直した。肉体のためと魂のためには、——臨終の聖体拝授にかわって、——人には医学と哲学がある、——民間薬や俗謡の焼きなおしではあるが。そして王侯貴族の気晴らしだったもの、彼らが禁じていた遊戯！ 地理学、宇宙形状誌、力学、化学！……

科学、新しい貴族！ 進歩。世界は進む！ 何故回らないといえるのか？

中世を通じてキリスト教者によって発展を阻害されてきた自然科学が、いわゆる啓蒙の世紀を経て、いよいよ社会の前面に出て、社会の進歩の観念と結びつき、科学主義、進歩主義といった思想が広まっていく。そのような社会的状況がこの叙述の背景にある。実際、第二帝政末期から第三共和政初期にかけての時期は、科学の大衆化が一つのピークを迎えた時期であり、そのような時代が如実に反映しているのである。「新しい貴族」は科学と進歩の信奉者である。

『魔女』においては、魔女たちが継承してきたさまざまな知識や技術が、近代科学の形成につながったという見解が見られる。これは魔術が錬金術とともに近代化学の祖であるとする知見である。上の引用部の「医学」が「民間薬」の焼き直しであるという叙述にもこの知見の一定の反映が認められる。ミシュレは中世の被抑圧者の側に立ち彼らに共感するが、これが近代の科学主義・進

歩主義の支持へとつながる。このように「劣等種族」の中から「新しい貴族」が勃興していくという観念自体はミシュレの見解を引きついだものと言える。ミシュレはキネやユゴーらと同様に進歩主義思想に同意し人類のありかたの改善の夢を託していたのである。

しかし語り手は「何故回らないといえるのか？」と問いかける。これは教会に裁判にかけられ天動説の撤回を求められたカリレオ・ガリレイが、撤回に甘んじつつ「それでも地球は回る」と言ったとされる話にもとづくパロディーであり、ここでは進歩主義への皮肉をなしている。そして語り手自らは「新しい貴族」の列に加わることはないこと、彼らに同意しないことを表明するのである。つまり語り手はミシュレと同様に「新しい貴族」の勃興を認めつつもそれを称揚しない点でミシュレと袂を別つのである。歴史家のガクソットは進歩主義の誤謬の一つとして「物質的進歩や技術的進歩と道徳面の進歩や知性の進歩とを混同し、あるいは少なくとも後者が前者に必然的に伴うと信じた」ことをあげているが<sup>(13)</sup>、このような誤謬への批判がこことにあると見てよい。また「新しい貴族」すなわち進歩主義者にとっては、社会の発展と環境の改善のためには絶えざる労働が望まれているらしく、語り手の「怠惰」の属性はキリスト教のみならず、そのような思想へも対立する。

「良い血」の者をキリスト教を奉じる者とするなら、それは「悪い血」のみならず、そこから派生した「新しい貴族」とも対立している。一方で「悪い血」でい続けるものは相対的には“良い”者である「新しい貴族」とも対立する。ここにはいわば三すくみというべき構造がみられる<sup>(14)</sup>。『地獄の季節』は反キリスト教思想を主軸とするとしばしば見られているが、決して宗教を否定することで進歩を称揚する作品ではなく、進歩主義思想をも否定する作品であることを銘記しておくべきであろう。

## 神と悪魔

古代から中世の歴史をたどる過程では、語り手は個人としてよりも種族とし



で語っていた。しかし第二節の終わりで「劣等種族」が大挙して「新しい貴族」となる過程をたどってからは、語り手は個人として語り始める。第三節以降ではふたたびキリスト者と異教徒という二項対立が内面の形而上学的葛藤として描かれる。

第三節に入ると語り手は、進歩主義者にはくみしないものの、キリスト教に救いを求めても救われないことを再確認する。「キリストはなぜ僕を助けてくれないのか」「福音は去った!」「僕はいつまでたっても劣等種族のままだ」。そしてかつて大陸におけるケルト人の拠点であった「アルモニックの浜」を起点にヨーロッパを去り、何処かの未開地で原初的な生活をおくり、やがて逞しい相貌をもって帰還することを夢想する。あるいはここにはすでに「感覚の攪乱」の試練を通じて獲得した「未知なるもの」を人類にもたらすというプロメテウスの詩人・見者詩人の業の構想が反映されているかもしれない。しかし第四節の冒頭で「出発はとりやめだ」として前段の夢想を取り消す。このフレーズは草稿の該当部分には見られないものであり、完成稿において第三節から第四節へのつなぎのために付け加えたものであろう。

第四節の以下の部分は草稿の叙述が明確に反映している部分である。草稿はほぼこの第四節および末尾の第八節の内容のみから成っているのである。語り手は自身の身にすくう「悪徳」に思いをいたしながら、「誰に仕えるのか? どんな獣を崇めなくてはならないのか?」と自問する。この自問は、草稿の該当部分では「どんなデモンに〈帰属する〉仕えるのか? どんな獣を崇めなくてはならないのか?」となっている<sup>(15)</sup>。「仕える」対象について疑問形容詞を用いる決定稿に比べより明示的である。キリスト教によって救われない「異教徒」の「悪い血」の者が仕えようとするのは異教の神であり、それはキリスト教思想によれば悪魔なのである。また「獣」の語はキリスト教思想において特に「ヨハネ黙示録」に見られるように悪魔にまつわる語である。

このように第三節の一部、そして第四節においては、「良い血」の者と「悪い血」の者という二項対立を超えて、神と悪魔の二項対立が潜在的な形ながら現れていると言える。

神に「捨て置かれ」悪魔への帰依にむかう語り手は次のように言う。

ああ！　こんなにまで捨て置かれているので、僕は完成への跳躍をどんな聖像にでも捧げてしまう。おお、我が自己犠牲、すばらしき我が慈愛！  
ただしこの低きところでのこと。

この一節は論者により解釈が分かれている。訳例では「完成」の訳語をあてた《perfection》は、キリスト教思想の用語としては徳をまっとうするという意味で「完徳」を言う。「自己犠牲」《abnégation》もしくは「献身」「自己放棄」は、キリスト教の要求する徳目の一つに数えられるものである。そして「慈愛」《charité》はカトリック思想では「信心」《foi》および「希望」《espérance》とならぶ三大対神徳の一つである。そこでブリュネルらはこの一節を語り手が一時的に神に救いを求めるも「低きところ」に留まったまま救われることがない状況を描くと解釈している。しかし、アントワヌ・アダンはこれをキリスト教のそれではない別様の「自己犠牲」と「慈愛」とであるとみている<sup>(16)</sup>。ステンメッツは「悪い血」第六節で語り手が天使の歌声に表れる「神の愛」を拒否しながら「二つの愛がある」として「僕は地上の愛に殉じることができる」と言うことに注意をうながし、やはりそのように解釈している<sup>(17)</sup>。キリスト教思想においては「地上」的であること自体が負の意味をもっていることを踏まえれば「地上の愛」もしくは「低きところ」での「慈愛」の提示そのものが挑戦的な意味を持つことになる。そして「完成」も「自己犠牲」も同様に陰画的なものの系列を成していると思われる。このように見れば『地獄の季節』第三パート「錯乱Ⅰ」において語り手が「妖術がかった」「慈愛」の持ち主として描かれること<sup>(18)</sup>、および最終パート「別れ」において語り手が自らの「慈愛」について「死の姉妹」めいたものと考えることとの一貫性が認められよう。時代の思想動向を鑑みればこのような別様の「慈愛」を想定することが充分可能なことがわかる。ドミニク・ミレエ＝ジェラルールが指摘するとおり、キリスト教思想の理想の代替物をキリスト教思想の観念の借用と

変形によって表現し掲げる態度は、半ば神秘主義的傾向をもった社会改革思想である社会天啓説にも顕著であり、そこでは「終末論」（最後の審判と神の国の実現）に代わる理想社会の実現のための新たな「慈愛」という観念があるのだ<sup>(19)</sup>。ここでは「慈愛」のみならず「完成」と「自己犠牲」もまた、キリスト教の説くそれらに対する代替物として悪魔的色彩を付与されながら系列を成しているのである。

このように第四節は「悪い血」の者である語り手が、「良い血」の者の神に背いて異教の神である悪魔に帰依し、キリスト教の説く慈愛ならぬ別様の慈愛を提示するという構想が浮かび上がるさまを読み取ることができる。これは「見者書簡」の自らをプロメテウス－サタン存在となす企図の展開ととらえられるが、『地獄の季節』の物語内においては、語り手自身がプロメテウス－サタンに帰依することを通じて、自らをもそのような存在となそうとする図式があることに注意したい。そのことはすでにプロローグにおいて語り手が自らを「デモン」によって「芥子の花」によって「戴冠」された、伝承上のアンチ・キリストのような存在として提示することによって暗示されているのであり<sup>(20)</sup>、つづく第二篇「地獄の夜」および第三篇「錯乱Ⅰ」において語り手がそのような存在として現れるのを我々は見ることになるのである。

### 「徒刑囚」と「司祭、教授、先生がた」

第五節では語り手は「子供時代」に憧憬を抱いたという「徒刑囚」を想起する。「彼には聖人にもまさる力があり、旅人にもまさる思慮があった——だが、あの人、彼自身だけなのだ！ その光輝と道理とを証する者は」。そして語り手は「徒刑囚」に自己同一視しながら、「激昂する群集の前で、銃殺執行隊に向かっている自分の姿」を思い浮かべる。

「司祭、教授、先生がた、僕を裁きにかけるなんて、あなたがたはまちがっている。僕はそんな連中になぞ属した覚えはない。キリスト教徒であつ

たためしなぞないのだ。僕は責め苦のさなか歌を歌った種族。法など知ったものか。道徳など持ちあわせない。僕は野蛮人なんだ。あなたがたはまちがっている…」。

ギュメにくくられたセリフの中で「徒刑囚」と彼を「裁きにかけ」ようとする「司祭、教授、先生がた」が対置される。後者は社会の「法」と「道徳」の担い手であり、キリスト教徒である。ここではふたたび旧来からの「良い血」の者が前面にとらえられているようにも見える。そして無力だった「悪い血」の語り手は「徒刑囚」に自らを重ねあわせることを通じて叛逆の意志に目覚めたかに見える。

中地は、この「徒刑囚」が「反逆的性格と救世主性」においてプロメテウスを思わせるとするが<sup>(21)</sup>、自らをサタンの下でプロメテウスの存在となそうとする語り手にとって、自らに先立つプロメテウス存在といえよう。さらには、つづく「地獄の夜」と「錯乱Ⅰ」の二篇において語り手がサタンの配下のアンチ・キリストのような存在として描写されることから翻って考えるならば、『地獄の季節』における『聖書』の一連のパロディーの中で、この「徒刑囚」はいわば洗礼者ヨハネに相当する存在として位置づけられよう。

### 「黒人」と「偽の黒人」

上の銃殺執行隊を前にしての言葉はギュメで括られたセリフとして提示されているが、その言葉につづけて、語り手はおそらく自己同一視による一体化の状態のままで言う。

そうさ、僕の目はお前たちの光明にはとざされている。僕は獣だ、黒人だ。だが僕は救われるのだ。お前たちは偽の黒人だ、偏執狂で、残忍で、吝嗇なお前たちは。商人よ、お前は黒人だ。行政官よ、お前は黒人だ。將軍よ、お前は黒人だ。皇帝よ、古くからのむず痒い者よ、お前は黒人だ。

サタンの蒸留所製の、無課税のリキュールを飲んだのだな。

執筆時の時代背景からすれば「皇帝」とはあるいは先に失脚したナポレオン三世の事とも見えるが、いずれにせよ、「商人」「行政官」「将軍」「皇帝」は先の「司祭、教授、先生がた」とともに「良い血」の者もしくは「新しい貴族」の系を成すものと言えよう。そしてそれらはひと括りに「偽の黒人」と称され、「黒人」と対置されることになる。文脈上「お前は黒人だ」と言う場合の「黒人」は、いわば“真”の「黒人」に対置される「偽の黒人」を指すと見られる。「光明」の語は、キリスト者においては神の光明を、「新しい貴族」においては「啓蒙の光」を、同時に意味するものととらえられよう。前の段落では、「良い血」の人々は、その価値観の普遍性を否定されるにとどまっていた。ところが、ここでは二項対立図式における「良い」「悪い」の価値の積極的な逆転がこころみられる。語り手は、自分が（野蛮な）黒人であるならば、「お前たち」は「偽の黒人」とであると言い、「法」や「道徳」の担い手を自認するような人々に対して、「偏執狂で、残忍で、吝嗇なお前たち」と呼びかけるのである。なお、後年のランボーの家族への書簡において、「文明化されたと称する国の白い黒人たち」という表現が見られ、このような観念はランボー自身が後々まで抱いていたものと見える<sup>(22)</sup>。「サタン」の語はこの文脈上ではやや唐突に現れるが、白人を「偽の黒人」と呼ぶような、白人の考える善悪を逆転した価値観の枠組みにおけるものであり、皮肉めいた批判ととらえられよう。

「黒人」について湯浅博雄は、プラトンの形而上学の通俗的一形態としてキリスト教をとらえた上で、そのような形而上学が不可能にしているもの、失われたものを取り戻そうとする存在であるとしている<sup>(23)</sup>。しかしながら、プラトン思想は、キリスト教思想からは魔術思想として忌避されるような諸思想、ロマン派の間で流行し「見者書簡」の理論にも影響している新プラトニズム～ヘルメス哲学系の思想にも通じていることから、このような見解は不適切であると思われる。

さて、語り手はここでそのまま「偽の黒人」への挑戦者となるのではなく、第五節の後半ではいったん「偽の黒人」たちのもとを離れ去ろうとする。「いちばん利口なのは、狂気が憐れな奴らのため生贄を求め徘徊するこの大陸を去ることだ。僕はハムの末裔の真の王国へはいる」。ハムとは、ノアの三人の息子のうち、二番目の息子で、黒人種の祖である。「真の王国」という語の「真」は、白人を「偽の黒人」と呼ぶ場合の「偽」とは逆に、正の評価値である。「偽の黒人」たる白人の「獣」の野蛮さを逃れて、原初の無垢が存在する場所に逃れるということであり、原初の無垢への回帰の志向の表現である。「僕は下腹に死者たちを飲みこむ。叫び、太鼓、ダンス、ダンス、ダンス、ダンス！」。これは先に中世の農奴における魔女の夜宴につづく狂騒の光景であり、やはり同様にグロテスクな形ながら、白人なら野蛮とみなすであろうような、原初の無垢の実現の光景として提示されているものであろう。

しかし第六節に入るや、この「真の王国」に「白人」が侵入する。「白人が上陸する。大砲だ！洗礼にしたがい、服を着て、働かねばならない」「心臓に恩寵の一撃を食らった。ああ！こんなことは思いもしなかった！」「大砲」*« Le canon »* は、「教会法」もしくは「聖書正典」を意味する *« canon »* を掛けたいわば掛詞であり、「恩寵の一撃」*« le coup de la grâce »* は、瀕死の状態にある者の苦しみを長びかせぬために加えるとどめを言う *« le coup de grâce »* 「とどめの一撃」をもじったものである。これら二つの表現には連続性が認められる。「野蛮人」をキリスト教に教化し文明化するという大義名分のもとに、武力をもって植民地支配をおしすすめた西洋人の姿を存分にとらえた皮肉である。「洗礼にしたがう」ことは、「服を着て」文明人らしくなり、生産性をおしすすめるべく「働く」ことをともなう。ここで改めて「偽の黒人」すなわち「白人」の「労働」の称揚があらわれ、語り手が祖先から受継いだという「怠惰」の「悪徳」が否定されることになる。

結局のところ「白人が上陸する」と言われているのは、空想裡に西洋文明を脱出し、西洋的な思念から逃れ原初の無垢を回復したと思った語り手の内に、キリスト教思想によって形づくられた西洋人の精神がふたたびその勢いをとり

もどしたことの表現である。

### 「神の愛」と「地上の愛」

そこでふたたびキリスト教思想との内的葛藤が描写されることになる。白人の船に乗せられた語り手は、自らをキリスト教の救いに預かった存在に擬しながら言う。

天使たちの道理あふれる歌声が救いの船から湧き上がる。神の愛だ。——愛にも二つある！ 僕は地上の愛に死ぬことができる、献身に死ぬことができる。僕がおきざりにしてきた魂たち、その苦しみは僕の出発でいやますことだろう！ あなたがたは遭難者たちのなかから僕をお選びになった。だけれどあとの者らは僕の仲間ではありませんか？

先にもふれた「神の愛」と「地上の愛」の「二つの」「愛」の対立図式が現われる。そして後に残して来た救いに預かれなかった者たちを気遣う。第四節で救いを求めた語り手であったが自身のみが“選別”されることは肯じることはできないのである。

第七節には、これを受けるように「僕は言った。神よ。僕は救いの中の自由が欲しい。しかし、いかにしてそれが得られようか」とある。また労働の拒否と「怠惰」のモチーフがふたたび現われる。「人生は労働によって花開く。古くからの真実だ。僕はといえば、僕の生には十分な重みがなく、行為という世界の大切な縫い目の、はるか上空へと浮かび上がり漂ってしまう」。

第八節は短いパートであるが、草稿では完成稿の第四節につづいて配置されていた部分である。語り手は何らかの隊列に加わりせかされながら進んでいる。ここでは救いのイメージがふたたび白人への隷属のイメージに変換されている。そして「これぞフランス的生というものであろう、名誉への小道こそが！」として「悪い血」をしめくくる。このようにフランスのいわば「新しい

貴族」を含む「良い血」の者、「偽の黒人」の世界に自らを馴致させることへの葛藤が示されている。悪魔を心に想起し別様の「慈愛」を構想し、さらにプロメテウスの叛逆者の前例への自己同一視によって叛逆の意志に目覚めたかのような語り手が、不本意な境遇で葛藤にとらわれたまま、「悪い血」は終わる。

## 結語

このように「悪い血」においては、語り手が自らの属性として提示する「悪い血」と「良い血」の二つのエートスの対立がさまざまに形を変え位相を変えながら展開する。そして作品に着手した時期に書簡で示された構想や、草稿を考えあわせれば、完成稿のうちに対立図式が二つの層をなしていることがわかる。

第一層として原初の無垢への回帰を求める主題がある。「悪い血」に対立するのはキリスト者たる「良い血」の者であり、そして科学主義者・進歩主義者たる「新しい貴族」である。「良い血」の者は「悪い血」の者を抑圧し無垢を失わせる存在であり、「新しい貴族」は「悪い血」の中から現れた無垢を失った存在である。やがて「良い血」の者と「新しい貴族」とを批判的にヨーロッパの白人として一括りにする包括的カテゴリーとして「偽の黒人」が現われ「黒人」と対置されるが、「黒人」にとって「偽の黒人」はやはり圧迫者として現れる。「悪い血」の者もしくは「黒人」は被抑圧者であり抑圧から逃れ無垢を回復しようとするが、決して逃れられない無力な存在である。ドラエ宛書簡に語られた構想はこの第一層を成すと見られる。

第二層としてキリスト教の教理をめぐる形而上学的葛藤がある。まず潜在的ながら神と悪魔の二項対立があり、神に救われることができない語り手は悪魔に帰依しようとする。それにともない、語り手はキリスト教の「慈愛」に対してその代替物たる「地上的な」「慈愛」を提示しているとおぼしい。後に語り手は「神の愛」に対して「地上の愛」を提示することになるが、ここでの二項対立は明示的である。その過程で語り手はプロメテウス―サタン的叛逆者たる



「徒刑囚」への自己同一視を通して叛逆の意志を顕在化させている。しかしそれらの営為も行き詰まりを迎える。この第二層は「見者書簡」の構想の展開したものであり、おそらく第一層の構想後にゲーテ『ファウスト』に刺激され、その悪魔的な面が肉付けされたものである。「悪い血」の草稿はもっぱらこの第二層を表現している。

二つの層には、異教徒の神がサタンであり、プロメテウスの詩人の業がサタンの色彩を帯びるに至るということで、連続性が認められるが、第一の層が逃避的な傾向を示すのに対し、第二の層は挑戦性・叛逆性を帯びている。「悪い血」の決定稿では二つの層が交互に構成され、無力な者として現れた語り手が叛逆に向かっていく一進一退の様の描写として成立しているのである。

#### 注

- (1) 『地獄の季節』を自伝的物語とみなすことについては Dominique Combe, *Poésies, Une saison en enfer, Illuminations d'Arthur Rimbaud*, Gallimard, coll. « Foliothèque », 2004, pp.75-79.
- (2) Arthur Rimbaud, *Œuvres complètes*, édition établie, présentée et annotée par André Guyaux, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2009 (以下 Œ-AG-09 と略記), pp.247-253.
- (3) ジョルジュ・イザンバル宛書簡およびポール・デメニー宛書簡。Œ-AG-09, pp.339-341, pp.342-349.
- (4) 中地義和『ランボー 精霊と道化のあいだ』青土社, 1996年, pp.159-160.
- (5) Max Milner, *Le Diable dans la littérature française de Cazotte à Baudelaire (1772-1861)*, José Corti, 1960, rééd. dans une volume, 2007, p.890.
- (6) Œ-AG-09, p.370.
- (7) *Ibid.*, p.371.
- (8) cf. Pierre Brunel, *Rimbaud : projets et réalisations*, H. Champion, coll. « Unichamp », 1983, pp.183-184
- (9) Jean-Luc Steinmetz, « Rimbaud et le Faust de Goethe », dans *Dix études sur « Une saison en enfer »*, Bacconnière, 1994, p.108.
- (10) Arthur Rimbaud, *Œuvres poétiques*, textes présentés et commentés par Cecil A. Hackett, Imprimerie nationale, coll. « Lettres françaises », 1968, p.328.
- (11) ベルナールによる指摘。Arthur Rimbaud, *Œuvres*, édition de Suzanne Bernard et André Guyaux, Bordas, coll. « Classiques Garnier », nouvelle édition revue, 1991, p.462.

- (12) *Rimbaud, Œuvres complètes*, édition établie, présentée et annotée par Pierre Brunel, La Pochothèque, coll. « Le livre de poche », 1999, p.51.
- (13) Pierre Gaxotte, *Histoire des français*, Flammarion, 1972, p.668.
- (14) なお十九世紀におけるプロメテウス象徴は多義的で、あるいは進歩主義の象徴でもあり、あるいはイエスと重ねられる場合もあった。Raymond Trousson, *Le thème de Prométhée dans la littérature européenne*, 3<sup>e</sup> éd, Droz, coll. « Titre courant », 2001, pp.393-396.
- (15) 草稿についてはオーレリア・セルヴォニが自身の論考にふした校訂に拠った。タイポグラフィ処理により紙葉上の状態を再現したものである。Aurélia Cervoni, « L'atelier d'Une saison en enfer. Étude des « brouillons » », dans *Rimbaud : des poésies à la saison*, études réunies par André Guyaux, Classiques Garnier, coll. « Rencontres », 2009, pp.213-238.
- (16) Arthur Rimbaud, *Œuvres complètes*, édition établie, présentée et annotée par Antoine Adam, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1972, p.956.
- (17) *Rimbaud, Œuvres complètes*, présentation par Jean-Luc Steinmetz, Flammarion, « GF-Flammarion », 2010, p.357.
- (18) 「錯乱 I」では一時的に語り手が「愚かな乙女」に交代し、元の語り手たる「地獄の夫」の言行を本人に代わって伝える。「地獄の夫」はアンチ・キリスト的存在（註 20 参照）として描かれる。
- (19) Dominique Millet-Gérard, « L'Évangile en enfer », dans *Rimbaud : des poésies à la saison*, études réunies par André Guyaux, Classiques Garnier, coll. « Rencontres », 2009, pp.259-279.
- (20) アンチ・キリストとは広義において反キリスト教者一般を指すが、キリスト教の伝承ではキリストの模倣者にして対抗者であり、サタンの化身もしくは配下の者など諸説ある。
- (21) Yoshikazu Nakaji, *Combat spirituel ou immense dérision? Essai d'analyse textuelle d' « Une saison en enfer »*, Corti, 1987, pp.54-55.
- (22) CE-AG-09, pp.664-665.
- (23) キリスト教をプラトン思想の俗化形態とする見解は湯浅による『地獄の一季節』解釈に一貫する基盤となっている。平井啓之, 湯浅博雄, 中地義和, 川那部保明 訳『ランボー全集』青土社, 2006年。